



Vol.42

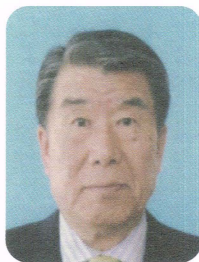
発行所
大分県立竹田高等学校
同窓会事務局

〒878-0013
大分県竹田市大字竹田2642番地
TEL 0974-63-3401
FAX 0974-63-1865
http://kou.oita-ed.jp/taketa/

印刷
株式会社 竹田支店

創立一二〇周年記念事業

からのスタート



竹田高等学校同窓会 会長
十九期生(昭和四十二年卒)
服部 眞二

竹田高校同窓会会員の皆様方には日頃より同窓会活動並びに母校の発展、充実に多大なご支援、ご協力をいただき心より御礼申し上げます。特に昨年は「大分県立竹田高等学校創立一二〇周年記念事業」の慶事を、学校、PTA、学林会、同窓会の四者で盛大に実施することが出来ました。その間、会員の方々からの物心両面に亘る、格別のご配慮、ご支援に対し、あらためて感謝と御礼を申し上げます。

一八九七年(明治三〇年)大分尋常中学校の四分校の分校として誕生、さらに一九〇

〇年に分校より分離独立、大分県立竹田中学となり、地域教育を担う学校として核となるべく体制を整えて以来、明治、大正、昭和、平成と激動する社会の中にあつて、一二〇年にわたり奥豊後地域の最上級学府としての教育を担い、創立以来二万六千人余りに及ぶ卒業生を輩出し、地域社会はもとより国内外で社会の発展に寄与貢献し、この中山間地域の教育発展にはなくてはならない高校となつて来ました。一二〇年という歴史の重さを感じつつ、さらなる新たな歴史への一步としていく為

の記念事業としてとらえ、四者一体となつた組織で取り組みました。

地域では少子高齢化、人口減少が益々進行し、グローバル化、IT化が地球規模で進む状況下、教育や学ぶことへの価値観も多様化しており、今後の竹田高校の存在意義をも危ぶまれる中、将来への明確な目標を持ち、これからの有為な人材を育み、さらに竹田高校の魅力を増し、飛躍可能な学校とする為に以下の事業を実施いたしました。

(1) 一〇〇周年より実施している「生徒海外派遣事業の継続」。この事業は、生徒の立志教育に役立ち、グローバルな視点を学び、ローカルに考え行動する生徒、将来世界を雄飛し、地域を担うリーダーとなる生徒の育成へ好機となっています。又、竹田高校進学への魅力の一つともなっています。昨年もベトナムハノイで研修しました。海外で働き、活躍する方々から体験談を聞

き、又ベトナム大使館を訪問し、直接大使より自身の経験を交えながら、日本人が世界からどう見られているのか、今後どう付き合っていくことが大切かなど、高校生というよりは日本人の一人としての生き方の話しを聞く機会を得た事は今回の大きな成果でした。

今後は本事業より進め竹田高校の足元を世界の中心に見据えたグローバル人材の育成につながるものと確信しています。

(2) の事業として、教育力向上支援、体育文化部活動支援として従来からの同窓会後輩支援制度をより強化充実した「生徒就学支援事業」の実施です。この事業により竹田高校で学ぶ生徒に更に充実した教育機会を提供し、来年度からの新しい大学入試改革にも他校に遅れる事なく対応し、生徒の主体的な学習と自己実現を一層可能なものとし、一人ひとりのスキルアップにつながりその変化が竹田高校の魅力となる為にも学校と一体となつて進めてまいります。

又、統括の事業として、記念誌の発行をいたしました。山あいの小さな城下町から、各界、各分野で活躍している

卒業生は枚挙に暇がない程です。何故これほどまでに、それぞれの世界で輝きを放つ人材が輩出されたのか、あらためて竹田高校の学びの歴史を検証することとしました。竹田高校には岡藩時代から、理想や志を胸に生きるための学びの遺伝子が時の試練に耐えて普遍的価値として存在し、連綿とたどつて来た、その遺伝子達が努力を惜しまず、高い志に向かい主体的に学ぶうとする生徒達に宿る時、大きな力となり、夢の実現へ確かな理念として継承されて来たからです。

その遺伝子を探る時、本校の源泉は一六九六年、関幸輔が四代藩主中川久恒公の命により、県下で最初の学問所として輔仁堂を開講した時までさかのぼり過去の賢人達が何に価値を見いださどう生きて来たのかを三二〇年の歴史の中で検証しました。

論語の中に、「君子は文を以つて友を会し、友を以つて仁を輔く」の精神こそが人が学ぶことの基本理念であると関幸輔は言っています。学びの中で考える力を養い、コミュニケーションを通して自分には厳しく他者には思いやりをもって、自己理解そして他者

理解を深める「冥加の訓」こそが時代の流れにふり回されることなく人間教育としての価値の遺伝子となり今日まで校風、伝統として継承され広視野と見識そしてやさしさ、思いやりを持った多くの人材を育む力となったと思います。記念誌編纂の中で実施した生徒との懇談会をさらに改善し、生徒達が竹田高校の歴史を探り、主体的に意見を交し、対話の中で竹田高校への理解を深め今、生徒自身が学ぶことの意味を発見し、今日の多様な価値観に適応できる人間力の醸成につながるプログラムとしてセミナーの開催を実施いたします。

又、四月の入学式後竹田高校の新たな歴史、伝統、校風を作るべく、新一年生に記念誌を竹田高校での教養本として解説、配布しました。竹田高校での三年間を充実した時になることを願っています。主要な事業について記載いたしました。大分県知事佐瀬勝貞様、竹田市長代理副市長野田良輔様、大分県議会議長代理地元県議会議員土居昌弘様、大分県教育長工藤利明様はじめ多くご来賓の方々のご臨席をいただき盛大に一二〇周年の式典の挙行、記念公演として、桐朋学園芸術短期大学の方々による音楽劇「瀧廉太郎物語」を上演しました。生徒の皆さんは、日本の夜明け文明開化、西洋音楽の黎明期、明治という時代を二十三歳の若さで駆け抜けた、校歌でも歌われている楽聖瀧廉太郎の生きた、そして竹田高校が創立した明治という時代を音楽劇の中で何かを感じ取ってくれたのではないかと思っています。又、いろいろな機会の中で竹田高校の魅力を伝える為に「PR動画」を作成いたしました。

創立一二〇周年記念事業の遂行のために、全国の会員の方々に募金をお願いいたしました。社会経済情勢の大変厳しい中にもかかわらず今回の周年事業の趣旨にご賛同いただき二千五百万円を越える募金となりました。皆様方の竹田高校に対しての期待の高さ、やさしさ、思いやりの深さをあらためて感じているところです。心より御礼と感謝申し上げます。

私共は母校が重ねて来た輔仁堂に始まり、文の由学館、武の経武館、医の博済館そして修道館へと、藩校からの歴史を顧る時その学びの歴史に誇りを感じずにはいられませ

ん。竹田高校がこれから二十一世紀を支える人材を育み、母校がさらに充実、発展し、飛躍することを確信しています。しかしながら竹田高校をとりまく環境は、少子高齢化、人口減少、昨年の竹田市の新生児は一〇〇名余りと、竹田高校の定員確保も非常に厳しい局面を迎えることが確実な状況となります。こうした情勢は現在四クラスからのクラス数の減少へとこれまでに三クラスの進学校はありません。歴史と伝統のある竹田高校といえども高校そのものの統廃合の対象となります。竹田高校史上未曾有の危機的状況です。十年前、緒方工業、大野高校、竹田商業の統廃合の様に、地域へのダメージは大きく、負の連鎖が想定されます。今回の一二〇周年が竹田高校の生き残りをかけた挑戦へのスタートととらえ、今後竹田高校のさらなる活性化、特色化を進め、いかに魅力ある学校、行つて学びたい学校、学ばせたい学校、生徒や保護者、地域から希望し期待される学校づくりへの遂進です。



竹田高校の輔仁堂以来四〇〇年への学びの成長は、切実な課題に直面している「今」にあります。生き残つた竹田高校はさらに光輝ある学校となるに違いありません。同窓会といたしましても、竹田高校魅力化について検討し、学校、学林会、PTAと一体的に行動し、さらに大分県、大分県教育委員会、竹田市、竹田市教育委員会をはじめ各方面に対しても要望、要請、協力をお願いし、竹田高校を未来に向けて守り育てる所存です。その為にも一二〇周年に寄せられました会員皆様方の竹田高校への思いをいただき、これまで以上のご支援ご協力をお願い申し上げます。



大分県立竹田高等学校
校長 木戸 孝明

今年度もよろしく
お願いいたします

ことが出来、瀧廉太郎の世界が時を超えて次の世代へ受け継がれていくと感じさせてくれました。また昨年度の八月の同窓会支援による生徒海外派遣事業でのベトナム研修、十月には竹田市への支援による川端康成記念講演会でのロバートキャンベル氏の講演会・地域・PTA学校が一体となって本校の教育を充実・躍進させる取り組みを支援していただきました。

さて、この三月に卒業した七期生一四五名の進路状況ですが、国立大学は四十三名でした。(二昨年は四十一名)私立大学が七十一名、短期大学・専門学校が六十六名、その他十三名(大分県警二名・豊後大野市消防署一名・自衛隊四名・山崎製パン一名等)となっておりますが、そのほとんどが九州管内でした。昨年度、同窓生の方々から「もっと関東等、外にでるよう

に学校が生徒の背中を押さなければ」と言われていたのです。次

次に生徒募集状況ですが、一六〇名の定員に対して一四八名(推薦入試五名・一次入試百三十九名・二次入試四名)の入学となり五年連続の定員割れとなりました。昨年度の生徒募集対策として、フェイスブック(大小すべての学校行事)・HP・ケ

ーブルテレビ・新聞・市報・教育チャンネル・竹高NEWS(竹田市・豊後大野市・大分市豊肥線沿線・阿蘇地区の中学生徒全員に各校十一回配布)・部活動の新設及び昇格・部活動交流(神興担ぎ、書道パフォーマンス、器楽部演奏会、合同演習)・中学校での学習サポート・中学校でのゲストティチャー、体験入学等の取り組みを実施しました。定員割れでしたが、当初の予想よりは多く、地域・教職員の努力が実った形となりました。「下宿はありますか?」との問い合わせもあり今後の課題(とくに三食の確保)となりました。今年度こそは六年ぶりの定員充足を果たすべく更なる取り組みを進めていきます。

最後にありますが、「自立自尊」・「進取研鑽」・「和衷協同」の校訓のもと、生徒一人ひとりを大切に、安全・安心な教育環境を整え、知性・感性教育の充実に向け、『グローバルな視点を持ち地域を支える人材を育成する』を、平成三十年度の教育目標に掲げ、一二〇周年の更なる節目とし、地域に信頼され、愛され、選ばれる学校への足取りを確かなものとしていきます。皆様方の一層のご支援、ご協力を賜りますよう改めてお願い申し上げます。

竹田高校活動状況報告

八月二日、大分県立竹田高等学校の生徒六名及び教諭並びに同窓会の皆さんが来館し、梅田大使と面会しました。梅田大使は自身の体験を交えつつ、(1)大使館の業務、(2)日本/日本人は世界からどう見られているか、(3)生きる上で大切なことについて説明し、生徒の皆さんからは、人生の目標をどのように見つけたらよいか、国際的な仕事に就くために高校生として何をすればよいか等について質問が寄せられました。

《在ベトナム日本国大使館HPより》



大分県立竹田高等学校二年 佐藤 太一

私たち生徒六人は、平成三十年七月三十一日から八月四日までの五日間、ベトナムのハノイを訪れました。到着後、ロンビン橋に行きました。歴史ある橋で、何度も修築されている橋です。ホテルは五つ星ホテルで凄く綺麗でした。

二日目は現地の大学生とハノイを散策しました。ベトナムは、準先進国ではあるものの、まだまだスラム街のような場所がたくさんあり、まだまだ整備されていない所がたくさんある点においては、日本と違うなと強く思いました。これからさらに発展していくベトナムに期待です。

三日目は大使館に行きました。大使の方から貴重なお話をいただきました。大使館に入るのは、初めてでこれから先もない経験だったので、本当に良い機会になりました。

四日目はパーカーライジング社ハノイ工場を訪問しました。日本人の社長と、何名かの日本人とベトナム人の従業員がいる会社です。工場見学や、社長と従業員とお話しました。せっかくなので、緊張もありませんでしたが、緊張もあり、なかなか自分達

から発言することが出来ませんでした。今回の研修で私たちの積極性の無さが浮き彫りになりました。

特に企業訪問では、ベトナム人の従業員の方達は月に二回ほど会社で日本語講座を行っており、日本語を学んでいるそうです。自分達から積極的に日本語を学ぶ姿勢は、今の私達にとって見習わなくてはいけないと強く思いました。

ハノイでのたくさんの経験を通して、私たちは日本という狭い世界から海外に初めて本当に目を向けることができました。正直日本の方が良いなと思う点も多々ありました。しかしそれらも含めほとんども海外初である私達にとっては貴重な体験でした。

私たちはさらに語学力をつけたいという思いが強まりました。今回体験したことをこれからの学校生活に生かしていきたいです。

今回の貴重な機会を設けていただいた、同窓会の皆様、先生方、保護者の方達に心から御礼申し上げます。そして六人で今回の研修に臨めたことを誇りに思います。

本当にありがとうございます。

竹田市総合文化ホール「グランツ竹田」オープン



大ホールの愛称（廉太郎ホール）は、竹田ゆかりの楽聖・瀧廉太郎にちなんだものです。豊かな空間を作る高い天井」と「響きを作る大きな「エアポリューム」、多くの直接反射音を生み出す内装壁」等、残響にこだわる設計はすべて“響きの良さ”を生むためのもの。座席数は七一三席。

クラシック演奏会やオペラ、バレエ、講演会等といった、様々なニーズに対応できる音楽ホールです。

●市民ラウンジ

幅広い用途につかえる、「憩い」と“交流”の場
木の温もりを感じることもできる、ガラス張りの開放的で明るい空間です。学校帰りの学生や小さいお子様連れの方など、多くの市民がいつでも立ち寄ることができ、ゆったりした時間を過ごすことができます。飲食関連イベントやロビーコンサートなど多様な催しもできます。

●多目的ホール キナーレ

市民が気軽に集い、「学び」と「創造」が生まれる空間に多目的ホールの愛称（キナーレ）は、竹田の方言「来なあえ（お越しください）」の響きにちなんだものです。「合理的で木架構」や木材を多用した内装、「自然光溢れる天井」等、空間は明るく開放感で溢れています。また、スタッキングチェアで一七〇席を設置することが可能です。映画上映会や講演会、ギャラリ、リサイクル、ダンス等のあらゆる目的に沿って使用できる「スタジオ」のようなホールとなっています。



中九州道路開通を控えて

「中九州横断道路」早期完成を願う女性の会会長

十二期生（昭和三十五年卒）

竹田高校同窓会副会長 堀 幸子

山紫水明の自然と、日本一と言われる山城「岡城」の城下町が育んだ多くの文化的・歴史的観光資源に加え、温泉にも恵まれたわが故郷竹田を私たちは大好きです。この素晴らしい竹田を「子や孫たちに、安心して安全に平和で豊かに暮らせるふるさととして継承したい」の想いで『中九州横断道路早期完成を願う女性の会』を多くの仲間達と共に立ち上げました。

初めての会合では、若い女性からは「結婚して子どもを産む時は大分まで行かねばならないし、こどもが病気になるれば大分まで行かねばなりません。なかなか竹田では結婚できません。なかなか竹田では結婚できません」「叔父が救急車で大分の病院に運ばれましたが、もう一〇分早かったら助かりましたね、と言われまして」「障害を持つ子供さんのお母さんからは「高度なりハビリを受けるために熊本や福岡に行きますが時間がかかりすぎなかなか思うように行け

ません」「文化的な催し物や大きな大会に参加したくても時間がかかりすぎてくたびれるのでなかなか行けません」、農業に励む方からは「竹田特産の野菜、花や果物を荷傷みせずできるだけ早く新鮮なもののを都会の人たちに届けたい」、牛を飼っている方からは「道がよくないと多くの人が牛を買いに来てくれるようになる」、商店街の人たちからは「観光客がもっと多く来てくれるためには道路アクセスがよくなることが必要」、高校生の親からは「大分方面からよい先生が来て欲しい」「竹田に働くところがないのでせめて大分まで通勤できるようになってほしい」等々切々と悩みや課題を話されました。

この会合を通じて、私たちは、命と生活の道としての「中九州横断道路」の大切さをあらためて認識し、その早期完成を関係者に強く要望していかなければならないとして、活動を始めました。

今年で活動を開始してから一七年目を迎えています。私たちの会には権力もなければお金もありませんが、ただ會員の皆様の温かい気持ちと励ましに支えられて活動を続けてきた気がします。でも、時には気持ち折れそうになることもありました。そんな時はいつも、広瀬勝貞知事をはじめとする県庁の方々、国會議員の古賀誠先生、宮田年耕元道路局長をはじめとする国交省の方々や多くの方々から、身に余る大きなご支援とご指導を頂いてきました。こういった人たちとの絆は、今でも私たちにとってかけがえのない宝になっています。そして「道づくり」は大変な労力とお金と時間がかかる大事業であり、「人づくり」でもあり、「まちづくり」でもあることを深く学ばせて頂きました。いよいよ本年度中に「中九州横断道路」は念願の竹田まで完成の運びとなりました。嬉しいことに最初の会合で出されていた課題はかなり解決されそうです。竹田高校にも優秀な先生方が大分方面から通って来て下さっています。

あとは、私たち市民がこぞつてこの道を使って、子や孫たちのために、どのように竹田を元気にするかを本気で考え、実際に行動することが大切だと思います。変らぬご支援、ご指導をよろしくお願いいたします。

私達も微力ながらみんなと一緒に頑張っていきたいと思えます。変らぬご支援、ご指導をよろしくお願いいたします。



広瀬中佐生誕百五十年祭を終えて

実行委員会委員長

十四期生（昭和三十七年卒）
（有）藤野屋商店 甲斐 正章

本年は、郷土の偉人廣瀬武夫海軍中佐が市内茶屋の辻で生を受けて丁度百五十年という節目の年でありました。時を同じく、明治百五十年祭が全国各地で催されたこともあり、廣瀬武夫顕彰会（会長首藤勝次市長）でもその実行委員会において、中佐の人徳や人間性を広く啓蒙する目的で百五十年祭記念事業に取り組み神社式典を斎行いたしました。

その記念事業の内容を申し上げますと、廣瀬神社の社務所及び記念館の大改修をはじめとして、倒壊した上境内玉垣の復元、境内大鳥居の補強・塗装工事、神社の屋根を覆うまでに成長した大木の伐採、歴史資料館に建立されていた中佐のブロンズ像を、神社正面の階段前に移設し、従来胸像は、拝殿前の左側に設置、社務所のトイレの洋式化、高齢者に配慮した記念館階段に昇降機の設置等々、多くのことをなし終えました。

これから、三十年先、五十年先まで、神社護持が万全なものとなり、実行委員会一同安堵しております。

また、中佐は、生涯で三千通以上の多くの手紙を残しておりますが、今回は特にその中の「絵葉書」のスポットを当てました。

廣瀬神社に現存する絵ハガキ七十通を東京大学大学院に学んだ笹本玲央奈氏の手を通じて、その現代語訳と解説付きで「廣瀬武夫からの絵はがき」を刊行致しました。

保存状態が悪くなった中で絵ハガキでしたが、今回見事なカラー映像としてよみがえり、百六十頁にわたる大作として、竹田市にとって貴重な宝物になりました。

只今、一冊二千元にて、顕彰会が販売していますので、どうぞ、お買い求めいただけますと存じます。

そして、五月二十七日の祝典には、廣瀬家をはじめ、大分県知事廣瀬勝貞様、衆議院議員衛藤征士郎様、県議土居昌弘様のご来賓の他百三十五名の多くの皆様の御参列をいただき、神事と式典を盛大に行うことが出来ました。

さらに、陸上自衛隊西部方面音楽隊のミニコンサート。

午後からは第二十六代海上幕僚長古庄幸一氏により、「廣瀬中佐に学ぶ」と題して記念講演もございました。

このように、百五十年祭は成功裡のうちに幕を閉じましたが、これも竹田市民をはじめ、全国の多くの方々から十八百万五千円にとどく御浄財をいただいたおかげであります。

改めまして、皆様方の廣瀬中佐への敬愛の心と熱い想いに深く深く感謝申し上げます。

終わりに、竹田高校同窓生の皆様には、新しくなった廣瀬神社へ是非一度お参り下さいますようお願い申し上げます。挨拶と致します。



冥加訓の教え

十四期生（昭和三十七年卒）
冥加訓を読む会 本田 耕一

江戸時代中期になると、封建制度の矛盾や流通経済が発達してきたため、諸藩は有用な人材を育て新たな経営の改善に取り組むようになりま

幕府は昌平坂学問所、諸藩はこぞつて藩校という教育施設を設けて人材育成を行っています。岡藩では貞享二年（一六八五）岡山藩から関正軒（後に一楽）という医者を招いて家塾を開き、子弟の教育を始めることとしました。有用な人材とは、孔子の教えに習い誠実な人になることでした。

しかし一楽は孔子の教えを受け継いでいる四書五経（漢文）をわかり易く教える方法について悩み、自ら学ぶ必要に迫れ、京都で有名な中村惕斎の門下生として一カ年間学びました。その後帰藩してか

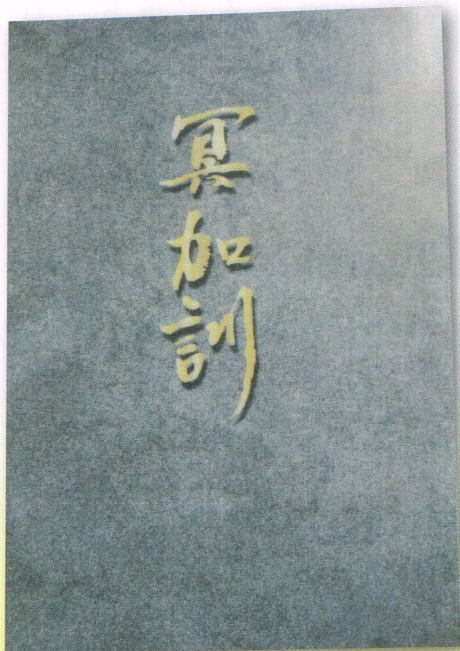
ら袖谷（現南高校付近）に輔仁堂という塾を開き、子弟に教えるようになりました。

将来の藩政を担う子弟が目指す国（藩）づくりには、単なる知識や教養としてではなく実行力のある人に育てる必要があります。そこで、書経の洪範（こうはん）という項を採り上げました。内容は、中国古代の堯や舜という国の理想の政治について「述べたものです。その九項に五福六極（ごふくりつきよく）」という教えがあります。

人が行うべき正しい道を歩めば五つの幸せを得、人倫（人として守るべき道）に外れた行動を重ねれば六つの禍を招くと諭しています。一楽は、豊かで安心して暮らせる国づ

くりには殿様、家臣、庶民の身分に拘らず誠実な人を養成することが大切だと考えたからです。冥加訓の序文に孔子の「人の生くるや直たれ、之罔（これな）くして生くるは、幸いにして免るのみ」を引用しています。つまり、誠実さがなければ人は信用しませんが、岡藩の活力には、相互信頼が必須だったのです。

また、天地の運行（摂理）と人の暮らしについて触れています。天地の恵みにより健康が維持されていることの意味を説いています。今の地球環境問題と類似しています。岡藩子弟の人材養成は十一歳（藩校入学）から始まりますが、幼児でも分かるように易しく解説したのが冥加訓なの



です。人は心の弱さから欲望の誘惑に負けそうになります。が、正しい心によつて克服すれば冥加が得られると説いています。

一楽の開所した輔仁堂は、由学館さらに現竹田高校の修道館に名を変えながらもその教えは脈々と引き継がれています。

竹田高校卒業三十周年記念

同窓会を開催して

四十期生（昭和六十三年卒） 姫野 武俊

私共は今年竹田高校卒業して三十年を迎えた昭和六十三年卒の四十期生です。当時は六クラス、二七一名でした。お盆の八月十四日にホテル岩城屋にて、卒業三十周年記念同窓会を開催しました。恩師三名、同級生九十名、総勢九十三名の出席でありました。高校を卒業して初めての同窓会ということもあり、あまりの懐かしさに話も弾み、時間を忘れて楽しいひとときを過ごすことができました。一口に三十年とはいえ、やはり長い年月で風貌も変わり一見して誰かわからない人もおりましたが、先生の方が全くお変わりないのには驚きました。会の終わりに校歌の斉唱と全員で円



になりストームの大合唱で大変な盛り上がりとなりました。三十年間行き来のなかった同級生とも再会し、今回出席できなかった同級生も含めて、また近いうちの再会を約束し閉会となりました。

竹田高校同窓会サイトの現状

竹田高校同窓会事務局 広報 四十七期生（平成七年卒）
（株）情報開発研究所 代表取締役 工藤 英幸

インターネットが普及して久しい昨今ですが、それにより、かつては情報が伝わらなかつた遠方にいる同窓会に興味を持つ卒業生にも状況を知る機会が発生しています。また、未来の新入生や現在の保護者等にも同窓会のありかたが伝わることにより、信頼の礎を構築できる可能性は、以前では考えられないことです。そして、情報化が進んだことにより、既存のテレビや新聞では不可能であった角度からの情報収集が可能となりました。現在、それらのメディアや出版業界の様子を鑑みるに、その効果は、潜在的な時代の転換のようなものをもたらそうとしています。

今回の開催にあたり、恒例ではありますが寄付金を募り竹田高校同窓会へ三十万円贈呈いたしました。在校生のため有意義に活用していただければと思います。

ここで、現在、公開している竹田高校同窓会のホームページの閲覧状況を紐解いていきます。それは、二〇一五年三月十四日から二〇一八年十月二十八日までの過去三年半ほどのデータに基づくものです。（グローバルアナリティクスから抽出した客観的な指標）まず、アクセス解析で、最も一般的な指標としてページビュー数（ネット上に公開しているページが開かれた回数）が存在します。これは人数では無く、一人が三ページ開いた場合はアクセス数は三となり、閲覧の趨勢を明示。大きなひとつの軸とされています。この期間のpv数は、三六五三二pvであり、諸外国

らのアクセスを除いた国内のみでは、二一一三〇pv。諸外国からのアクセスはスパム行為（ネット上での迷惑行為）を目的としたものによる可能性がります。しかし、卒業生で海外にいる方も多くいるため、海外在住の卒業生によるアクセスの可能性も十分に考えられます。そこで、裏打ちする情報として卒業生の海外在住者を調べる場合、アクセス解析では不明なため、それ以外の手段で調査するとなると、個人情報保護に関する配慮に重きが置かれる昨今、安易に進められることではな

人となり、四十七都道府県中で、上位の五都府県が全体の七十九%を占めています。九州内に最も閲覧者が多く、関西、関東の大都市からアクセスが多いことが特徴。関東には関東同窓会があり、独自のホームページも開設していることから、そちらへのアクセスも考慮すると、関東は九州に次いでアクセスが多い地域になります。

一年単位の趨勢は、二〇一八年十月二十八日から過去一年間では、九七一〇pvであり、それ以前の年にはバラツキがありますが、年平均で一万分程度のpvがある状態です。そして、今回データが抽出できた期間、三年半ほどの閲覧者数の合計は、一〇四五五人。諸外国からのアクセスを除外すると国内の閲覧者数は計六〇三一人です。

市区町村ごとには、一位が大分市九二九人、二位が大阪市八七四人、三位は福岡市七〇一人、四位は竹田市五四三人、五位が豊後大野市二七三人であり、アクセスのある三四九市区町村の中で上位の五市で全体の五十五%となっています。大分県内の市が三つ入ったが、竹田高校に主に入学する竹田市や豊後大野市ではなく大分市が一位です。

都道府県ごとには、一位が大分県一九〇九人、二位が大阪府九三六人、三位は東京都八四一人、四位は福岡県七八九人、五位は神奈川県三一八

現在、大分市の人口が、四七・八万人であり、竹田市が二・二万人、豊後大野市が三・六万人であることを考慮すると、四位に入った本校が所在する竹田市からのアクセスは地域内の関心の高さをうかがわせ、竹田高校が地域を表すシンボルの一つになっていると言えます。そして、グローバルやヤフー

等のサイトで検索して情報を得ることが一般的になっていく現状としては、どんな言葉で検索し、アクセスしているかは重要な指標となります。

検索キーワードとしては、一位が「竹田高校」一六四人、二位が「竹田高校同窓会」六十五人、三位が「竹田高校同窓会」三十九人、四位が「大分県立竹田高校」二十九人、五位が「竹田高等学校」十八人。これは大きく分けると、竹田高校の学校名と、同窓会組織のものに二つに分けられることになり、上位に集中しています。

つまり、竹田高校について検索した人が、同窓会の情報に触れている傾向を示しています。



→ 岡城

✓ 竹田高校

り、当然、竹田高校そのものと同窓会組織は同列で語れるものではないですが、ネット

上での存在は学校との緊密な関係により、その存在意義を發揮しています。

グローバル人材の育成について

四十四年卒二十一期 阿南 修平

日本は、戦後のベビーブームから一転、出生率が下がり、人口減少の一途をたどりつつあります。二百年年頃には人口は、六千万人と予想され、大分県では四十六万人、現在の半分以下になると想定されています。

の育成が叫ばれている昨今、人材の育成については非常に関心が高いのが実情です。人材育成の歴史を遡ると、江戸時代には藩校という形で行われており、竹田市の中川藩時代には関一楽は早くも元禄九年(二六九六)年、豊後の国で最初の学問所(輔仁堂)を、柚谷で家塾を開所、その後、由学館、修道館と名前

人口移動によるものですが、どのような世界が日本に待っているのかわかりませんが今後大変少ない人口で地域を維持していかなければならないのです。そのためには、公的機関等の機能の縮小化、ITやAIをあるいは、異業種間の連携を強化し、新たな産業機械、産業構造、産業システム、生産方法と言った過去に全くこだわらない垣根を超えた改革、制度が必要になってきています。全く新たな世界を構築することになり、過去にとらわれない、考えを構築できる人材の育成が急務になっているのです。

は変わりますが、豊後の国では、最大の藩校になったと言われています。江戸時代後期、藩財政の窮乏と文化の百姓一揆により由学館が一時停止状況になりましたが、田能村竹田は由学館の立て直しを藩主に建言書で申し出ており、学問の重要性を訴えているのです。いつの時代でも人材を育成することは、大変重要なことであると考えられています。

なります。人材育成は人財を造ることであり、強いては、地方創生、地域活性化の礎になるものです。江戸時代では上杉鷹山のように、藩主が率先垂範、上杉家財政改革を実施、立て直しを図っています。諸藩も独自のアイデアで独立財政型の藩政を行っており、経済基盤を堅固にしなければならず、藩主の使命は大変なものがありました。現在の各地方自治体の市政状況は、明治以降の中央集権政治体制ですべての地方行政は国の方針で動いています。しかしながら、地方の人口減少、高齢化現象が加速、ずるずると状況が悪くなっているのです。なぜ、このようなことが起こるのか、それは一重にこのような時代を乗り切るため、リーダを含め、幅広い発想を持った人財の育成がなされていまいことが原因かと思われます。

異を知り、国の発展の参考にすると、このグローバルな視点を持つことが非常に重要なことでした。これからの日本、地方を活性化するには、若い時分からいろいろな国を知る、ふれるということが特に重要です。グローバル人材の育成は、どのような状況立場である、常に自分を顧みることがができる人材であることが大切で、それにより客観的なものの見方、中立的な見方、自己の役目が判断でき、国内外で恥ずかしくない堂々とした言動ができることとなります。外国を学ぶということは、自分を、自国を、育った地域をより知るといふことに密接に関係しているのです。最近では外国の方を、学校や市内で見受けられようになり、接する機会が大変多くなってきました。これからの地方を、国を担う若い人々には、そのような機会を少しでも活用して、コミュニケーション能力を向上していただくべきだと思います。グローバル人材育成は、価値観、文化の違いを他言語で知ることから始まるのです。

るように、積極的にグローバル人材を育成するための体制構築を、竹田高校を含む関連機関と連携をとりながら速やかに諮るべきです。また積極的に支援する時期に来ているのではないかと思量されます。

同窓会役員紹介

- 顧問 田北 和義
- 会長 服部 眞二
- 副会長 堀 幸子
- 事務局長 高野 厚憲
- 事務局員 阿南 修平
- 会計 和藤 民子
- 監事 赤嶺 英幸
- 学校監事 森 日登美
- 台澤 哲郎

編集後記

今回の同窓会報から、母校竹田高校や同窓会の活動状況のみでなく、少子高齢化に向かっている、ふるさと竹田市の主な行事、同窓会の方々の域内外での活躍状況や思いについても掲載することとしました。これからも皆さんの投稿等により、会報をもっと身近なものにしていきたいと思っております。 広報担当 阿南修平